

2024年10月27日 青戸教会 「魂は殺せない」

高橋克樹牧師

聖書 箴言8章1、22〜31節、マタイ福音書10章28〜33節

マタイ福音書10章28節はいきなり『体を殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな』と、イエスは言っています。これはイエスが弟子たちの中から12人を選抜したときの訓示の言葉です。彼ら弟子たちが福音伝道に派遣された時に、迫害者たちができるとはせいぜい体を殺すことだけだと言っているのです。すぐく乱暴な言い方のように聞こえますが、この言葉の次には、『雀1羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。あなたがたの髪の毛までも、一本残らず数えられている。だから、恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている』と語っています。父なる神への信頼が迫害に耐えていく根源的な力になることを言っているのです。

元法政大学の総長だった田中優子さんが、集英社新書から「苦海・浄土・日本」という本を出版されているのですが、その中で石牟礼道子さんが水俣闘争の中で「もだえ神」という存在だったと言っているのです。石牟礼道子さんは小説「春の城」で天草四郎を描いているのですが、この天草四郎が島原の乱でキリシタンとして、一揆軍の中心人物として指導的な立場に立ったのは、天草四郎がもだえ神の信仰を持っていたからだということです。もだえ神というのは、計算をしないで人に尽くす人のことで、苦しんでいる人がいるととにかく駆けつける。駆けつけるのだけでも、ほとんどの場合、何もできない。何もできないけれども気持ち、心をその人に寄せていく。天草四郎は、キリシタン弾圧出苦しんでいる人たちのところに行って、もだえたことが一揆軍のリーダーになるきっかけ唱えるのです。ありていに言えば、イエスがイスラエルの宗教社会の中で、障害のために差別された人たちに寄り添ったのと似ているわけです。

この「もだえ神」という概念は、イエス・キリストが指し示した神の姿と似ています。例えば、ルカ福音書15章の放蕩息子の譬えに出てくる、父親は放蕩のかぎりをつくして帰宅した息子を遠くに見つけて、「憐れに思い」走り寄って首を抱いて接吻したのですが、ここで「憐れに思い」というギリシア語がスプランクニゾマイという言葉で、「はらわたがもだえる」という意味の言葉なのです。はらわたがよじれるような思いで、神のもとに帰ってくる人間を迎える神の愛の姿が、子の放蕩息子の父親の姿勢に投影されているのです。苦海浄土と言う本は、わたしの世代では大学生が必ず読んだ本の一つです。ほぼ私と同じ世代である田中優子さんが、法政大学の1年生のときに、講義で教授が石牟礼道子の「苦海浄土」を読んで聞かせてくれた時の衝撃をずっと持ち続けていて、何度か石牟礼道子さんと対談をして、作品を読んできた中で、「苦海・浄土・日本」という本を上程したのです。この本の中で面白い記述がありました。「高漂浪」（たかざれく）という言葉は、普段は世のためにも家のためにも何の役にも立たなくて、魂だけが遠くに行っている人のことを指して言う言葉なのですが、「高」を取って「漂浪」（ざれく）という言葉が水俣にあって、この言葉は「魂が抜けだす」と言う意味で、その魂に連れられてふらふらと出て行って、帰り道がわからなくなる。そういうことが実際に人間の人生で起こってしまう。田中優子さんは、石牟礼道子の生き方は、魂が実際にチッソの水銀で苦しんでいる人のところに行ってもだえること

で始まっていると分析しているのです。悲嘆にくれている人を心配して何をおいても駆けつける。ただ、駆け付けるけれども、なにもできないでただ立ち尽くしてもだえているだけ。そのような人間のありようは、「相手の気持ちになって考える」と言うようなことではない。いかなれば、苦しむ魂の傍らに、自分の魂が瞬間的に移動して成り代わっているような状態を「されく」の魂と表現し、それが「もだえ」という現象だということです。

その事例として、落語の三遊亭圓朝の創作落語の「文七元結」（ぶんしちもつとい）を引き合いに出しています。娘が家出をして自らの意志で吉原に身売りに行くのです。お金を稼ぐためなのですが、それは親父さんが、良い大工なのだけれど、かけ事が好きなんです。家がどうにもならなくなって娘は家出したのです。親父さんはそれに気づいて吉原に追いかけていくのです。女将さんに会って、何とか娘を返してもらえないだろうかと頼むんです。女将さんは「あなたがちゃんと働かないと娘さんは返ってこない。娘さんはここにあずかる。店には出さない。お金を貸してあげるから、質に入れた道具箱を出して働きなさい」と言つて、お金を50両貸すんです。この50両は、親父さんが質屋から道具箱を出すためのお金なんです。

親父さんがこのお金を持って家に帰ろうとしたら、橋の上に誰かがいる。知らない青年なのだけれど、川に飛び込もうとしている。それで思わず駆け寄って、お前は何する気だと、欄干から引きずり下ろして、訳を話せと。その青年が言うのは、お客さんのところへ勘定を取りに行ったのだけれども。そのお金を落としてしまったらしい。このままじゃ店に帰れない。だから死ぬんだと。青年は、何度も何度も、欄干に登って飛び降りようとするのです。それを叔父さんは何度も引きずり降ろそうとするのですが、ついに、大事な50両を押し付けて、その場を去ってしまうという話なのです。

この落語に登場する叔父さんの行動は考えてやったことではないのです。自分も困っている状況なのですが、娘は生きていますし、自分も生きています。でも、お前は今死のうとしていく。だから、助けるしかないのだと。だから、大事なお金を押し付けて名前も言わずに行ってしまう。こういうことが人間には起こりえるのです。

田中優子さんは日本文学が専門の方なので、やや難しい話になりましたが、これを私たちキリスト教の言語で言い表すと、神は苦しんでいる人のところにイエスを遣わすのですが、そのイエスが苦しんでいる人に「あなたは独りで孤独のうちに苦しんでいるように思っているかもしれないが、神がいつも共にいてくださっているのです」と言って励ますのです。ただそれだけでなく、そのもだえ苦しんでいるあなたを背負って歩いてくださっていることに気づかされる時、神に自らのすべてを委ねた歩みを始めることになるのです。このような神への全幅の信頼を持つことがイエスによって語られているのです。

雀はこの世の中で小さいものの象徴ですが、その雀も神がその生活を守り導いている。それゆえに、私たち人間も神の守りと導きのもとにあるのであって、たとえ、個人的に苦しくみじめな状態だと思えるようなときでも、神の慈愛の中に置かれている人生を歩んでいる魂は、神によって生かされている。その魂のありように気づくことが大切であり、神に生かされている魂が決して殺されることはないのです。